

山内清男と 1924 年春の加曽利貝塚発掘

武井 則道

- 1 問題の所在
- 2 1924 年春の加曽利貝塚の発掘
 - a 本来の発掘の目的
 - b 発掘参加者
 - c 調査経過
 - d 本来の発掘調査の成果
- 3 山内清男らの加曽利貝塚の発掘
 - a 山内清男らの研究目的
 - b 山内清男らの発掘方法
- 4 山内清男の加曽利貝塚発掘による土器型式の設定と編年
 - a 山内清男の土器型式の設定
 - b 山内清男の土器型式の編年
- 5 山内清男の縄紋式土器研究方法
 - a 松本彦七郎の日本石器時代土器の研究
 - b 山内清男の縄紋式土器研究の方法
- 6 1924 年春の加曽利貝塚の発掘の歴史的意義
 - a 歴史科学の存立基盤の確立
 - b 縄紋時代の生産・聚落・墓地の研究への道をひらいた

1 問題の所在

奈良県の平城宮の一角に操車場をつくろうとしたことに対して保存運動が行われた。これに続いて千葉県加曽利貝塚に破壊の危機がおきた。これをうけて岡本勇は「加曽利貝塚の意義」を書かれている（岡本 1963）。そのなかで 1924 年春の加曽利貝塚の発掘についてふれられている。「土器の型式のちがいを層位的にとらえ、時間差とみることの正しさを示したわけであり、その意義は大きい。加曽利 B 式、加曽利 E 式の名は、ここにその根拠をもつのである。なお、この発掘に当時新進の学究、山内・八幡・甲野等が参加していたことを忘れてはならない。かれらはその後、縄文式土器の編年研究を推進させる大きな力となるからである。」

しかし、ここでは山内清男がおこなった土器型式の内容・層位的事実・編年については論じられていない。

山内清男の没後 25 年記念論集を編集・刊行された中村五郎はこの発掘について「3 月 24 日～4 月 3 日千葉県加曽利貝塚の発掘に参加。この発掘で加曽利 E・B 両式が知られる。同時に先生が堀之内・安行の両式を指摘、貝塚の層位から加曽利 E→堀之内→加曽利 B→安行、という型式変化を確認、これを契機に縄紋土器編年の整備に着手。」とのべている（中村 1996）。しかし、ここでも山内清男が 1924 年春の加曽利貝塚の発掘で何があったのか、歴史科学的に具体的かつ実証的に検討する作業はおこなわれていない。そのために山内の日本先史土器研究の方法がいかなるものか十分解明されていないのである。ここでは山内清男の先史考古学の方法論についてささやかな試みをおこないたいと思う次第である。

なお、本論の中では取り上げた方は敬意を表すべき人びとであるが、すべて省略させていただきました。お許しをこう次第である。

2 1924 年春の加曽利貝塚の発掘

a 本来の発掘の目的

発掘の目的は本来つぎのようなものであった。

「本邦石器時代の人骨に就いて多年の研究を重ねられた小金井良精博士が関東地方の貝塚で親しく資料を得られる為予て千葉県千葉郡都村加曽利貝塚の発掘を計画された。それは明治四十年の秋、東京人類学会第三回遠足会に次いで故坪井正五郎博士が石田収蔵、松村瞭両氏と共に加曽利貝塚を発掘した結果、資料として立派な人骨を獲て、小金井博士の研究に提供して以来の計画であつた。そして、一昨年博士は松村氏、大山柏公爵と共に実地踏査を試み、実測や試掘を行つたが爾来色々な事情の為発掘は延期されて今年に至つた。そして愈々三月之を決行する事になり、松村氏や私達もその発掘に参加する事となつた。」（八幡 1924）。

「小金井良精博士は古人骨を蒐めるために、この貝塚の発掘を企てられたのですが、先生は古人骨の研究には、ぜひとも人類学と考古学とが、相互に助けあわねばならない、という信念をもっておられました。そこで、東京大学人類学教室主任松村瞭博士に相談され、松村先生は、人類学教室の山内清男・八幡一郎・宮坂光次の諸氏や私などをひきいて、この調査に参加されることとなったのです」（甲野 1953）。

b 発掘参加者

「三月二十四日、弥生の空きはまりなく晴れて、蘇った春の光を漲らせて居た。私達一行小金井博士夫妻松村氏、甲野勇君、山内清男君、それに私の六人は両国駅から出発した。そして千葉駅に待合せた宮坂光次君を加へて加曽利貝塚に着いた。此日には小金井博士と親交あるユンカー—高教師も行を共にした。」（八幡 1924）。

発掘参加者は小金井良精・小金井きみ・松村瞭・山内清男・甲野勇・宮坂光次・八幡一郎・ユンカーである。ユンカーは一高のドイツ語の教師で、小金井良精がドイツ語で論文を発表する時に添削を受けていた人である。

c 調査経過

調査経過については唯一の記録である八幡一郎の記述による（八幡 1924）。

3 月 24 日「発掘地の選定——殊に人骨の存在を予想しての選定は極めて困難である。そこで上羽貞幸氏が昨秋人骨を発見したと云ふ場所を発掘する事とした。此處は大山公爵の実測図に B とした所なので、それを踏襲して B 地点と便宜上呼び、翌二十五日から正式に発掘を開始した。」（図 1 1）。

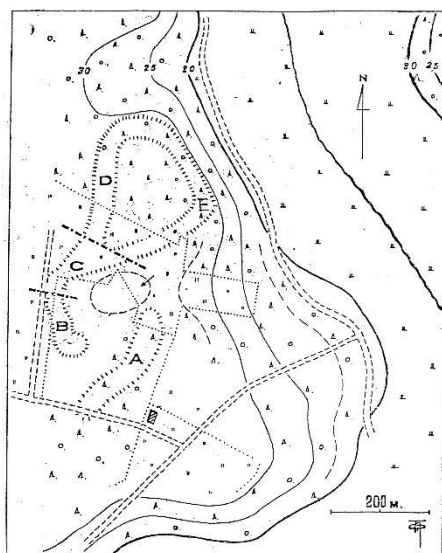


Fig. 2 加曾利川一帯図



1

2

縄紋土器型式の大別

	渡島	陸奥	陸前	関東	信濃	東海	畿内	吉備	九州
早期	住吉	(+)	槻木 1 2	三戸・田戸下 子母口・田戸上 茅山	曾根? × (+)	ひじ山 粕 須		黒 島 ×	戦場ヶ谷 ×
前期	石川野 × (+)	圓筒土器 下層式 (4 型式以上)	室濱 大木 1 2 a,b 3-5 6	蓮田 花積下 式 關山 黒濱 諸磯 a,b 十三坊臺	(+) (+) (+) 跡 場	銚ノ木 ×	國府北白川 1 大歳山	磯ノ森 里木 1	蕨?
中期	(+) (+)	圓筒上 a b (+) (+)	大木 7a 7b 8 a,b 9, 10	御領臺 阿玉臺・勝坂 加曾利 B (新)	(+) (+) (+) (+)			里木 2	曾畑 阿高 出水 }?
後期	青柳町 × (+) (+)	(+) (+) (+)	(+) (+) (+)	堀之内 加曾利 B " 安行 1, 2	(+) (+) (+) (+)	西尾 ×	北白川 2 ×	津雲上層	御手洗 西 平
晩期	(+)	龜ヶ岡式 (+) (+) (+)	大洞 B " E-C " O1, 2 " A, A'	安行 2-3 " 3	(+) (+) (+) 佐野 ×	吉胡 × " × 保美 ×	宮瀧 × 日下 × 竹ノ内 × 宮瀧 ×	津雲下層	御 領

註記 1. この表は假製のものであつて、後日訂正増補する筈です。
2. (+)印は相當する式があるが型式の名が付いて居ないもの。
3. (×)印は型式名でなく、他地方の特定の型式と關聯する土器を出した遺跡名。

3

図 1

3月25日から28日まで

「B地点は深林の奥深くあつて幾分隆まった地である。大山公爵の試掘地に接し、上羽貞幸氏発掘地点を含ませて略々二メートル平方を一区とする区画を東西、南北の方向に添ふて定め廿区に分ち、最初〇・六米位の表土を松の樹を倒しつゝ剥ぎ去つた。そして分担で一つの区の貝層を発掘し了る毎に更に貝層の下の黒味を帯びた褐色の土の層を〇・四一〇・八米ちあままで掘下げつゝ進んだ。」「この土の層の中又は貝層底から人骨が発見されるであらうと云ふ事は他地方の発見状態に徴して先づ考慮すべき事であつた。のみならず

この層中には多量に他の遺物が含まれて居る。で小金井博士は特にこの箇所を意を注がれたのである。」

3月29日から4月3日まで

「二十九日には部隊を二分して一はB地点を継続し、他は以外の場所を掘ることに決した。そして第二発掘地としてB地点の北方二三町、水田に臨む台地の端の急傾斜面を選定しE地点とした。」「B地点には甲野君と私E地点には宮坂君と山内君が当った。E地点傾斜面に添ふて幅二メートルの溝を作り表土、貝層と下の方から上へと掘り進んだ。発掘によつて私達は直感的にB地点の黒褐色土層の中からもE地点発見の土器に似たものが時々現はれた。B地点附近表面に散布する土器とE地点附近表面に散布する土器を拾つて見ても大体異つた性質のものであることは察せられた。」(図1-2)「人骨は遂に発見されさうもない。これでは折角の大発掘も目的を達する事が出来ない。そこで更に第三発掘地として松村氏の選定に基づいて、一昨年D地点と名づけて試掘を行つた所を発掘する事になり、三箇所に分れた。このD地点はB地点の北、E地点の西に当る。」「松村氏の発掘中のD地点の貝層の中には頭を高い方に置き屈葬の状態で一体の人骨があらはれた。」「B地点には「貝層下の黒褐色土層から頭蓋、下顎とこゝにも人骨が現はれたのである。」「頭を北に向け伸葬の状態で横たはつて居た。」「四月一日に至つて又もやD地点から先の人骨の南の方僅かばかり離れた所に一体の人骨が、之も頭を傾斜面の高い方に置き屈葬の状態であつた。」「予定の日数はいつか過ぎて居た。兎に角人骨三体分を得土器も細片であるが大きな箱十に入る程採取し、貝獣魚類の骨、石器、骨貝器等を発掘する事出来たので三日には発掘を打ち切り残務を整理して帰京した。」

d 本来の発掘調査の成果

「人骨三体分を得土器も細片であるが大きな箱十に入る程採取し、貝獣魚類の骨、石器、骨貝器等を発掘する事出来た」

3 山内清男らの加曽利貝塚の発掘

a 山内清男らの加曽利貝塚の発掘の研究目的

大正時代のはじめ頃に山内清男・甲野勇・宮坂光次・八幡一郎たちは東京帝国大学理学部人類学教室の選科生として学問研究の研鑽に励んでいた。彼らは鳥居龍蔵が日本の有史以前の歴史について論じる説に魅力を感じると共に慕って選科生になったのである。

山内清男はつぎのように書いている。「松本博士は縄紋土器各期の年代細別に成功せられた。旧来の東大人類学教室には鳥居博士が健在であり、年代別に対して同時代異部族説を打ち立て論陣を張られた。貝塚からは薄手の土器(薄手式)が出で、海岸部族これを作る。包含層には厚手式が出で産地の部族の産であるとするのである。私は大正6年埼玉県飯能で開かれた武蔵野会の例会伺つて以来多くの文献に接して居る。その最も盛大となったのは「諏訪史第一巻」及び「上伊那の考古学的研究」に於てであつた」(山内 1970)。鳥居の同時代異部族説は多くの著書や論文で述べられている。それらの中でよく論じられているのが「有史以前の武蔵野」(鳥居 1920)である。

「有史以前に於ては武蔵野の海岸地方と台地々方とはどんな状態であつた? 是等両方面は当時同一であつたかは又は相違して居つたか、言は人種学上、先史考古学上頗る興味ある問題」としている。そして「私の今日までの研究結果に拠ると不思議にも奇妙にも以上の二方面の遺物は多少相違して居ります。」「海岸地方の遺物は先づ土器の上から云ふと其製作は精巧で小型、磨きをかけ、殆ど指で撮める程のヒネリ把手を付け、表面に竹木の薄片で沈み紋様を画き、土器の内部の上縁の所に紋様を施し、精巧な物に朱を施し、且つ

此の地方の者は盛に土偶土盤を作つて居ります。次に石器は如何と云ふに石斧は比較的小数、石鏃は極めて乏しい、之に反して骨器を製作使用して居るから蓋し当時にあつては此の地方では骨鏃骨銛や竹木片の鏃などを盛に用ゐたでありましよう。」これに対して「台地々方の遺物は如何と云ふに、言は前者と反対で土器は厚く粗造巨大、粘土にマイカシストを混ぜ其紋様の如きテキピカルな渦巻を示し、之が発達変化して種々の紋様、さては把手となりて或は蛙、鳥等の如き形状を呈して居る。此の把手の変化は台地遺蹟の一大特徴と申してよろしい。要するに是等の土器は厚手粗大把手の変化に於て特有であります。而して此の地方には海岸地方の如く土偶や土盤などを有つて居りません。次に石器は如何と云ふに先づ石斧として打製石斧が多く、之に磨製の物を交へて居る。石鏃は此の地方には比較的極めて多数で当時之を盛に製作使用したことが知れます。石鏃の原料は主として黒曜石若しくはフリント(?)で出来て居ります。石器の数量から申すと海岸地方のものと取て比較にはなりません。当時の武蔵野には彼等の二大部族の存在があつた事を認めねばなりません。私は以上の海岸地方と台地々方の部族を区別する名称を其の各々土器の特徴から見て、仮に之を前者の方を薄手式派と称し、後者の方を厚手式派と称して置きたい。

薄手式派の遺跡は殆んど総て当時の海岸に存在し、而かも殆んど総て其れが貝塚であります。」これに反して「厚手式派遺蹟は武蔵野の海岸線に貝塚として残つて居るものは極めて極めて少ない。果して然らばこの事実は先史考古学上頗る一考すべき価値ありと云はねばなりません。」

鳥居龍蔵は薄手式派の人びとが海岸地方に住み、漁人的な生活をしていたとした。そして、厚手式派の人びとは台地地方に住み、狩人的な生活をしていたとみなした。このような例について「今日の民族の土俗に求むると、彼の西比利亞のベーリング海峡附近に居住する海岸チュクチ陸地漂白チュクチ、或は海岸コリヤーク陸地漂白コリヤークと同じ」とし、「海岸に居住するものは漁人的の色彩をゆうし、陸地に居住するものは狩人的色彩を有つて居ります。」としたのである。さらに、陸奥にみられる土器について出奥式と名づけて、この地方に一つの大部族がいたとしたのである。しかも同時に存在したとみたのである。

鳥居龍蔵の同時代異部族説に対して松本彦七郎が異時代年代説を発表したのである。ここでは「宮戸嶋里濱及気仙郡瀬沢介塚の土器 附特に土器紋様論」(松本 1919b)、「宮戸嶋里濱及気仙郡瀬沢介塚の土器 (二) 附特に土器紋様論」(松本 1919c)、Note on the Stone Age People of Japan (Matumoto 1921) を参考に見てみよう。

松本彦七郎は貝塚の発掘調査をおこない、地質学における層位分層による単層毎に遺物—土器だけでなく石器・骨角器・貝器・貝・動物の骨などを採取した。それらを式という概念で捉えていた。それを堆積の順序で時間的に並べる作業をした。土器の模様でどのように進化発展するか系統進化を研究したのである。

層によって第一期 大木式、第二期 瀬沢式、第三期 宮戸式、第四期 大境五層式、第五期 大境四層式、第六期 埴瓶斎瓶期 に分けている。この「式別は遺跡乃至その内の層としてのものにして、云はゞ古生物学的層位学的の式別乃至時代別と同類のものなり。人種別概念を含ま」ないものである。

つぎに土器模様の変遷については

第一期 凸線紋アイヌ式曲線模様の全盛。

第二期 凸線紋アイヌ式曲線模様の上退と凹線紋アイヌ式曲線模様の発展。

第三期 凹線紋アイヌ式曲線模様の上退と縄紋の発展。

(い) 単方向の縄紋の全盛。

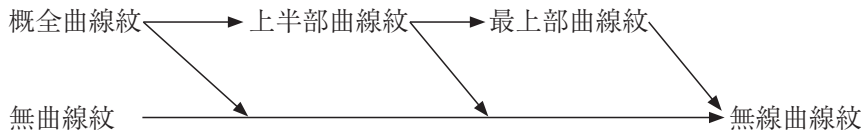
(ろ) 単方向の縄紋の減少と羽状縄紋の繁盛。

第四期 縄文の上退と直線模様の発展。第一次の耳及アイヌ式曲線模様の全滅。

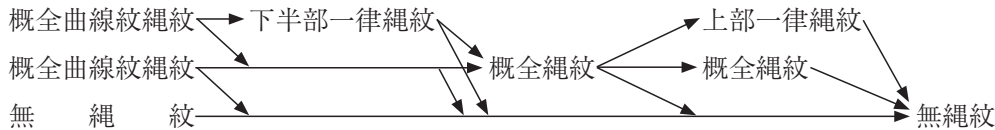
第五期 縄紋の全滅。

とあらわして、「土器模様の変遷は生物学上進化の可逆ならざるを述べたるドーロー氏法則によく合致するもの」としている。

アイヌ式曲線模様の直線模様化で系統進化の過程を示している。



縄紋の上方発展と上方退却とその消失でつぎのような系統進化をあらわしている。



なお、英文で発表された「日本石器時代住民に関する覚書」では

I 序 言

II 人骨を出土するより重要な石器時代遺跡

III 日本石器時代の編年の区分——土器の装飾パターンの退行進化

IV 石器時代住民の埋葬風習

V いくつかの歯の人工的変工あるいは抜歯の風習

VI 現代日本人とアイヌの人種的式別

VII 日本石器時代人の本来的位置——結論的覚書

と色々なことが論じられている。日本石器時代土器の研究については前者の論文と同様なことが述べられている。すなわち層位分層による単層区分による式別、土器模様の装飾の変化、その土器模様の系統発達あるいは系統進化である。

山内清男・甲野勇・宮坂光次・八幡一郎たちはこの二つの学説のどちらが学問的に正しいと言えるのかを明らかにすることが研究の目的であったのである。

b 山内清男らの発掘方法

「二メートル平方を一区とする区画を東西、南北の方向に添ふて定め廿区に分ち、最初〇・六米位の表土を松の樹を倒しつゝ剥ぎ去つた。そして分担で一つの区の貝層を発掘し了る毎に更に貝層の下黒味を帯びた褐色の土の層を〇・四—〇・八米ちあままで掘下げつゝ進んだ。」「この土の層の中又は貝層底から人骨が発見されるであらうと云ふ事は他地方の発見状態に徴して先づ考慮すべき事であつた。のみならずこの層中には多量に他の遺物が含まれて居る。」(八幡 1924)。

山内清男は「磐城国新地村小川貝塚発掘略記」の中で「新地村小川貝塚が加曾利貝塚と同じ手で発掘される事にきまつ」たとのべている。

「第一区二米四方の表土を撥ね、貝層を発掘した。貝を交へた表土約半米、貝層七〇糎を前後する位、遺物は豊富、土器片多量、骨器も亦驚くべく多い。」そして「貝層下の黒土層を発掘した。土器片その他の遺物は貝層底より深さ二〇糎にまで占位して夥しく多量、それより下も土の質は同様であるが、遺物の存在をほとんど見ない。そこで第一区北側の下に深い穴を掘り下げて、貝層底より漸次砂利を交へ水を含んだ地層に(殊に四十糎以下に著しい)に向つて推移する事を確かめ得た。かくして第一区の発掘を了」つた(山内 1924)。

4 山内清男の加曽利貝塚の発掘による縄紋式土器の型式設定と編年

山内清男は1924春の加曽利貝塚の発掘で4つの縄紋式土器の型式設定とその編年をおこなったとみずからのべている。それは『日本先史土器図譜』においてである。これを手がかりにどのようなものか検討してみる。

a 山内清男の縄紋式土器の型式設定

加曽利E式（山内 1939）

加曽利E式についてはつぎのように述べている。

「加曽利E式は関東地方縄紋土器中期の後半に当る土器型式群であつて、大正十三年下総国千葉郡都村加曽利貝塚E地点発掘の土器を標準として指摘したものである。」「加曽利Eなる名称も何等典拠とすべき文献がなく、隠語の如く用いられて今日に至つた訳である。その間に意味は多少拡大されて真に加曽利貝塚E地点発見の土器の範囲外のものまでに及び、更に若干の細別型式に分かたれる様になつてゐる。」

加曽利E式の細別については、加曽利貝塚のD地点の土器には磨消縄紋縄紋の手法があることを確認していたことから東北地方の「加曽利E式にへいこうするこの地方のときには磨消縄紋を伴わない古い部分（大木8a式及8b式）とこれを伴う新しき部分（大木9式及大木10式）に分れることを知つた」ことによつて4つの細別型式に分けるとした。そして、「加曽利Eの土器は比較的厚手の作りであつて、深鉢形が最も多い。そのうち多数のものは口頸部が膨大して内曲して戻る。この種の土器に付けられる装飾は一定の方式があつて、膨大した口頸部が一つの文様帯をなして居る。細別のうち最も古い部分では、口頸部に突起把手が多く、口頸部の隆線文様これに関連して発達して居る。体部の文様帯には縄紋のみのものがあるが、隆線の文様あるもの、沈線の文様あるものもある。真の加曽利E地点の土器の大多数及び下総上本郷E地点の土器では口縁部に突起殆ど無く、体部の文様は沈線のみであり、縄文も斜行するのみで、縦行するものを含んで居ない。」ただし、この図譜では真の加曽利E地点の土器は全く示されていない。これは山内の八幡一郎に対する君は分かるよねということの一つの態度の表れと思われる。なお、図譜には常陸国・下総国・武蔵国の土器が示されている。それぞれ地方型を暗示している。

加曽利B式（山内 1939）

「加曽利B式は関東地方縄紋式土器のうち後期の型式であつて、大正十三年下総千葉郡都村加曽利貝塚B地点貝層の土器を標準として認められたものである。」「同時に自分が指摘した堀之内式及び安行式と共に所謂薄手式（縄紋式後期及晩期）の三区分として今日一般化して居るが、当時の型式制定は不確実であつた。このために詳しく説明はなされていない。」

堀之内式（山内 1939）

「堀之内式は関東地方縄紋式土器後期の初頭に位するものであつて、下総東葛飾郡国分村堀之内貝塚の土器を標式として、大正十三年自分が指摘したものである。」「最初利用した資料は大正六年に採集したもの及び大正十年鳥居博士一行（自分も参加）が発掘されたもので、これらは殆んど堀之内式からなつて居たのである。」

安行式（山内 1939）

「この式は元来所謂薄手式の中に含まれて居つたのであるが、大正十三年春、堀之内式、加曽利B式と一緒に、そのうちの細別として指摘されたのである。標準として用いた材料は大正八年自分が藤枝隆太郎君と共に発掘した武蔵国北足立郡安行村領家猿貝塚出土土器であつた。しかし今から考えればこの材料は貧弱

なものであつて、単に当時手許にあつたため利用され、その遺跡の名が偶々型式の名称としてかんようされて仕舞つただけでのことである。その後、この型式の良好な資料は武蔵國南埼玉郡柏崎村真福寺貝塚から発掘され、甲野氏の報告が出版せられ（昭和3年）、安行式の標準的典拠」となつたのである。」甲野の真福寺貝塚の報告書のことを指している（甲野 1938）。

b 山内清男がたてた縄紋式土器の編年

山内清男は 1924 年春の加曽利貝塚の発掘の結果をうけてつぎのようにのべている。「加曽利 E 地点貝塚発掘土器、加曽利 B 地点貝塚の発掘の土器は各別個の一型式とみとめられ、爾後地点の名称は夫々の型式を指示する言葉となつた。これに前後して堀之内貝塚の土器は大正十年鳥居博士が主宰、小松宮内山内等の参加した発掘の土器及大正六年の僕の表面採集品を標準として一型式と認められ、安行貝塚の土器は大正八年僕と藤枝隆太郎氏との組織的発掘之土器を基準として他の一型式と認められた。これらの名称は型式を指示するものとして用ゐられた。以上の各型式だけに就ては加曽利 B 地点貝層以下の土層には「堀之内式」が稍多量、「加曽利 E 地式」に近縁な土器が少量発見された。更に僕は「堀之内式」は「加曽利 E 式」より後であることを示す型式学的な根拠に基いて、加曽利 E、堀之内、加曽利 B の年代的序列を認めた。「安行」は最近甲野君の報告した真福寺貝塚の土器と同じで、加曽利 B 式以後と考へられた。」

山内清男は 1924 年春加曽利貝塚 B 地点、E 地点の層位的事実から加曽利 E 式、加曽利 B 式という年代的な序列を確認した。さらに、堀之内式、安行式については型式学的根拠から加曽利 E 式、堀之内式、加曽利 B 式、安行式という関東縄紋式土器の編年をたてたのである。これが山内自身みずから「加曽利貝塚の発掘（大正十三年三月）は土器型式の内容決定、層位的事実、年代的な考察に向かつて僕らを躍進せしめた」といった内容である。

ここに、山内清男・甲野勇・宮坂光次・八幡一郎らの縄紋式土器の編年の研究が開始されたのである。

5 山内清男の縄紋式土器研究方法

a 松本彦七郎の動物学・古生物学・日本石器時代土器の研究

山内清男の縄紋式土器の編年の研究を理解するためには松本彦七郎の動物学・古生物学・日本石器時代土器などの研究をみておく必要がある。

松本彦七郎は 1887（明治 20）年 6 月 9 日に栃木県下都賀郡穗積村に生まれる。父松本虎吉、母フクの次男としてである。兄弟は 7 人である。

1907（明治 40）年東京帝国大学理科大学動物学科に入学した。1911（明治 44）年に東京帝国大学理学部動物学科を卒業した。大学院に進学し、副手、助手、講師を勤めた。

1911 年（明治 44 年）に東京帝国大学理学部動物学科を卒業した（磯野 1988）。分類学が衰退し始め実験的な生物学が隆盛してきた中、クモヒトデ類の分類学的研究を開始し、新種記載を含むテヅルモヅル類の論文を続けて動物学雑誌に発表した（松本 1911, 1912a, c）。1912 年 1 月 14 日に青木熊吉が沖ノ瀬で採集したウミユリとクモヒトデの珍種を松本が研究し、それぞれ、カハウミユリ（松本 1913）、ハスノハクモヒトデ（松本 1912b; Matsumoto, 1913）と名付け新種として記載した。松本はこのハスノハクモヒトデを古生代の化石として知られるクモヒトデ類と近縁であると位置づけることにより、ラマルク以来用いられてきた腕の分岐パターンによるクモヒトデ類の分類体系を見直していくこととなる（図 2-4）。松本はその後研究を進め、クモヒトデ類の内部骨格、特に、囀口板の型および生殖板と輻楯の関節の型に注目した従来とは異

国学士院賞を受賞した。1917年には、「A monograph of Japanese Ophiuroidea, arranged according to a new classification」を著した。後の1921（大正10）年、この業績によって松本は帝国学士院賞を受賞した。

これらの著書によって分類体系を一新し、松本は新しい亜綱から新種に至るまで、数多くの新タクサを創設した。松本が提唱した新しい分類体系は、日本産のテヅルモヅル類を詳しく研究した Ludwig Döderlein が反対する（入村、1991）など賛否両論だったものの、Fell の研究などによって受け入れられるようになった。近年になって分子データも使用することによりクモヒトデ類の分類体系が見直され始めてはいるが、1917年にまとめられた松本の研究を基礎にした分類体系が長らく用いられてきたのである。

松本彦七郎は動物の種の同定分類をきちんとおこない、その種が産出される層位分層でえられた層を確定し、その進化を確定させるために系統進化の検討をおこなうという研究方法をとっていたのである。

1914年に東北帝国大学理学部地質鉱物学科講師となり、哺乳動物の古生物学的研究を開始した。1920年に、東北帝国大学助教授になり、古生物学研究のため、イギリス、アメリカ、ドイツへ留学した。7月9日に横浜を出帆。翌年12月1日に神戸港に戻ってきた。留学中に松本は、オズボーンのもとで研究を行った。オズボーンはそれまでの記載、分類中心の古生物学に地質学、比較解剖学、機能形態学や生物学の新しい見地を取り入れ、また、個人中心の研究から組織的な研究を進めつつあったという。ヨーロッパ・アメリカで深められつつあった進化論を吸収してきた。1922（大正11）年に教授となり、地質学第三講座の担当となり、後に古生物学講座を担当することになった。

松本はオズボーンたちがエジプトのファユーム（Fayum）で発掘した資料、また大英博物館（自然史）やカイロ地質学博物館の同様な資料をもとに長鼻類の起源論に取り組んだ。

一年間の留学中に行った研究は1921年から1926年にかけて『ロンドン動物学会誌』と『アメリカ自然史博物館紀要』に4編の論文として発表された。それらによればファユームで発掘され、最古の長鼻類とされたメリテリウム *Meritherium*、パレヨマストドン *Paraeomastodon*、フィオミア *Phiomia* と同所で発見された岩狸類と海牛類の類似点と相違点を明らかにし、それらはアフリカで共通の祖先から始新世から漸新世に適応拡散した結果、それぞれに分化したものであるという多系統説を主張している。この考えはその後多くの研究者の支持を受け、長鼻類の起源論の基礎となっている。日本のゾウ化石をもとに松本は長鼻類の分類の系統についてきわめて精力的な研究を行っている。1924年には次のような3つの論文を『地質学雑誌』に発表しているが、これらはその後の日本の長鼻類の系統分類の研究に貢献することとなった。

「日本産化石象の種類」『地質学雑誌』第31巻第371号（松本1924a）（図2-5）

「日本産ステゴドンの種類」『地質学雑誌』第31巻第373号・第374号合冊（松本1924b）（図3-6）

「日本産マストドンの二種類」『地質学雑誌』第31巻第375号（松本1924c）（図3-7参照）

また松本は哺乳動物化石によって日本の新生代層を生層学的に区分することを試みた。その最初の論文は1916年に「本邦哺乳類化石表」として『地質学雑誌』に発表されたが、1923年にオーストラリアのメルボルンとシドニーで開催された汎太平洋学術会議に「日本の第三系の哺乳層準、改訂された層序と陸成および海成堆積物の相互の関係」（英文）論文を提出し、化石哺乳動物相の地質時代を決めるのに、日本のように海成層の発達していることの利点を強調している。このように松本の研究はその後の長鼻類の研究に基礎となるものであり、またその後に国際的な研究に寄与することとなった多くの重要な課題を提出したものであった。

松本彦七郎の日本石器時代土器の研究

松本は縄文土器を骨董の対象とすべきものでなく、重要な学術研究の材料であるとした。そして、「是を

	<i>Prostegodon</i>	<i>Stegodon</i>			Elephantine phyla
中部 洪積 (Tyrrhenian Miozian)		<i>Sinensis</i> (Japan)	<i>orientalis shodoensis</i> (Japan)	<i>insignis</i> Nar-boda mutation (India)	
下部 洪積 Cromerian			<i>Orientalis</i> (Japan, China)	<i>airawana</i> <i>trigonocephalus</i> (Java)	
上部 鮮新 Calabrian		<i>sinensis</i> (China)	<i>orientalis</i> (Japan, China)	<i>insignis</i> <i>ganesa</i> (India)	
下部 鮮新 (Asian Plaisancian)	<i>stegodontoides</i> (India)	<i>clifti</i> (Japan, India)	<i>bombifrons</i> (Japan, India)		
上部 中新上部 Upper Pontian	<i>latidens</i> (India)	<i>clifti</i> (India)	<i>bombifrons</i> (India)		
上部 中新下部 Lower Pontian	<i>latidens</i> (Japan, India) <i>caulleyi</i> (India)				

6

	<i>Pakomastodon</i>		<i>Phimasia</i>	<i>Cheolophodon</i>	<i>Zygolophodon</i>	<i>Taolophodon</i>	<i>Tetratylodon</i>
	<i>Nimrododon</i>	<i>Paradodon</i>	<i>Hominastodon</i>				<i>Anantus</i>
上部 洪積 Miozian		<i>americanus</i> (N. America)					
中部 洪積 Tyrrhenian Miozian		<i>americanus</i> (N. America)					
下部 洪積 Cromerian		<i>americanus</i> (N. America)					
上部 鮮新 Calabrian					<i>apertus</i> (Europe)		<i>apertus</i> (Europe)
下部 鮮新 Asian Plaisancian					<i>apertus</i> (Europe)		<i>apertus</i> (Europe)
上部 中新 Pontian	<i>apertus</i> (Europe)	<i>americanus</i> (N. America)		<i>corvus</i> (India)	<i>apertus</i> (Europe)	<i>apertus</i> (Europe)	<i>apertus</i> (Europe)
中部 中新上部 Sarmatian				<i>apertus</i> (Europe)	<i>apertus</i> (Europe)	<i>apertus</i> (Europe)	<i>apertus</i> (Europe)
中部 中新中部 Tortonian		<i>americanus</i> (N. America)		<i>apertus</i> (Europe)	<i>apertus</i> (Europe)	<i>apertus</i> (Europe)	<i>apertus</i> (Europe)
中部 中新下部 Helvetic		<i>americanus</i> (N. America)		<i>apertus</i> (Europe)	<i>apertus</i> (Europe)	<i>apertus</i> (Europe)	<i>apertus</i> (Europe)
下部 中新 Burdigalian		<i>americanus</i> (N. America)	<i>americanus</i> (N. America)	<i>apertus</i> (Europe)	<i>apertus</i> (Europe)	<i>apertus</i> (Europe)	<i>apertus</i> (Europe)
上部 漸新 Agoutianian Stemian							
下部 漸新 Sarmatian	<i>americanus</i> (N. America)		<i>americanus</i> (N. America)				

7

図 3

製作し是を使用した民族の心理状態を考察するの資料ともなれば文化の程度推察するの資料ともなり、又時代の前後を推定するの資料ともなる」と述べ、縄文土器の紋様の変遷をたどると目的を示している。

彼はまず貝塚の層位的発掘調査に取り組んだのである。宮城県宝ヶ峰貝塚、宮城県宮戸島里浜貝塚、瀬

澤貝塚などを発掘調査した。これらの貝塚で得られた縄文土器を層位分層により単層の確認と土器の器形・紋様など観察して、紋様がどのように変遷していくか、を明らかにした。その成果が「宮戸島及瀬澤介塚の土器 附特に土器紋様論」(松本 1919 b)である。これを分かりやすく書いたものが「日本石器時代土器」である。「遺跡を分層的に調査して見ると上下で土器の様子が異なる事が普通」で、「その異なり方の方向は何時も一定して居る」とした。「是によつて異なる遺跡又はそのうちの層位の新古乃至同期等の関係を推定することが出来る。又時代別の標準を設ける事も出来る」とした。ついで第一期、大木式、第二期、瀬澤式、第三期宮戸式、第四期、大境五層式、第五期、大境四層期、第六期、埴瓮斎瓮期に分けて示した。さらに、模様の変遷について述べている。第二期の鉢型又は壺型土器の模範的な模様を描いている。「口縁上には少数個の把手が存し、把手と把手との間を聯結して小刻の一行が存する事もある。頸部の分化しない鉢型土器ならば口縁部の直下より、又頸部のよく分化して居る壺型ならば頸部を除いて胴部の最上部より以下土器中央部迄の間を占めて上下に圧迫された様な形の渦巻的曲線模様がある。この曲線模様の上限と下限とには一条又は二条の水平直線が刻まれてある。是等の線紋は凹線紋である。土器中央部より以下は斎株を除いて一律に単方向縄文がある。更に最下部には底に接して平滑部があり、此平滑部の上限をなしては一条又は二条の水平直線が刻まれてある」と書き、「この一個の土器の内には全四次の模様の全てが含まれてある。把手口縁上の小刻の列は第一次の模様であり、上半部の曲線模様は第二次の模様であり、下半部の一律縄文は第三次の模様であり、接底平滑部及其上限の直線は第四次の模様である。この土器に見る第一次は夙くに退化した模様であり、第二次は全盛の峠を越して退化し初めた模様であり、第四次は将来の進展を期すべく僅に発芽した許りの模様である」(松本 1919 b)。つまり縄文土器の紋様は下から上に上がっていくことを明らかにしたのである。

東京帝国大学理科大学動物学科で学んだ動物の種の分類とその系統発生、ヨーロッパ・アメリカで深められつつあった進化論を土台に打ち立てられた学説といえる。だからこそ山内清男が縄紋土器の編年研究の拠りどころとしたのである。

b 山内清男の縄紋式土器の研究方法

山内清男はみずからの縄紋式土器研究の方法について十分に説明したことはない。佐藤達夫は「日本考古学総論としての『日本遠古之文化』と、基本的資料集としての『日本先史土器圖譜』は、博士の代表的著作である」として対をなす著作ととらえた(佐藤 1974)。筆者もかつて同じようにみていた。しかし、いまはこの立場をとらない。『日本遠古之文化』山内清男が大正末から昭和はじめにおこなった発掘調査および研究に基づいて日本先史時代の文化史として叙述したものであるからである。このなかでは縄紋式土器の研究方法について宣言もしくは理念ともいうべきことがのべられているが、具体的かつ明快にわかりやすく詳細には語っていない。松本彦七郎の日本石器時代の研究方法来に学びながら山内の縄紋式土器の研究方法について検討してみたい。まず遺跡を発掘して層位分層によって型式を認定することが第一の作業である。

佐原 眞 の証言

2×2mを1区として掘り、層毎に土器を区別する。層が厚ければ、10～15cm毎に分けて掘り土器を区別する。土器がみつかりと顔をよく見る。ひとつの層から出てくるから同時期、とはすぐに扱わない。1層中での土器の集散状況を重視する。その夜、土器を水洗する。洗いながらまた顔を見る。別の層の土器と一緒に違うか……洗い終わると、新聞紙上にのせた土器を見くらべて「土器型式」の変遷を考える。これはあくまで作業仮説だ。翌日昨日発掘した隣りを掘る。昨晚、仮りに作った「土器型式」が、はたしてその順で出てくるかを確かめながら掘る。仮説の正しさを確かめ、誤りを正す。このような作業が、1遺跡の数

地点で、あるいは数遺跡で繰り返し繰り返しおこなわれた（佐原 1981）。

佐原眞は山内に「土器型式をどのようにして決めたか」「尋ねたことがある」として、その答えがこれである（佐原 1984）。佐原の理解の結果をのべたものである。しかし、山内は一つひとつの層位を確認する方法について具体的には語っていない。山内清男の最後の弟子をみずから称する山村貴輝が「発掘調査の現場では層位分層に最善を尽すこと」の重要性を山内がのべていたという。しかし、山村も具体的な話を聞く機会をのがしたとのべている（山村 1996）。では山内の発掘調査の方法を知る手だてはないのであろうか。筆者は愛知県吉胡貝塚の発掘調査報告書で知ることができると考えている。

愛知県吉胡貝塚での層位的発掘

山内はこの発掘調査書で第三章 各班調査報告 第三節 第二トレンチ を報告している（山内 1952）。一、序言 二、発掘の経過 三、遺跡の構造 四、石器、骨角器、貝製品 五、土器概観 と記述している。しかし、肝心の層位分層の認定手続きについてのべていない。「第二トレンチ構造略図」を手がかりに検討してみたい。（図4-8）。

「これらの土器は各區毎に、各區では発掘の順序に従つて、深さ或は層によつて区分されて採集され、現場で紙袋に容れられ、その紙袋に、発掘區、層又は深さ記入されている。袋の数は百数十に達しており、資料は一應それだけに区分されている譯である。教室に搬入後、袋中の土器を點検し、中には湿っているものがあるので一旦乾燥し、水洗した。次に土器片に発掘區及層を示す符合を書き入れた。挿圖四一は各區の土器が如何に区分され発掘されたかを示すために用意したものであつて、各袋書いてあつた層の名称、発掘された日（左側）、及びこれに与えたそして土器片の裏面に記入された符合（右側）を示したものである。」

A区では8の層に分けて掘っている。27 表土下混土貝層 A 11。29 第一貝層下部 A 11、29 第二貝層（焼土）A 12 + 22 を出土した遺物の検討の結果、縄紋式晩期新の純粋な層と認定している。8 炭 A 23、8 貝層上部 A 24。8 貝層下部 A 25、8 貝層下混土貝層 A 26。この二つの層の出土遺物の検討・吟味の結果縄紋式後期に認定している。砂礫層上部 A 27。

B区では8つの層に区分している。6 第一貝層 B 1、（第二貝層）（B 2）。6 第三貝層 B 3、67 第四貝層 B 4。これらの層の出土遺物の検討及び吟味から縄紋式晩期新に認めている。7 第五貝層 B 5、7 第六貝層 B 6。この二つの層は出土遺物の吟味の結果、縄紋式晩期旧に認定している。8 礫層上部 B 7、8 砂礫層下部 B 8。この二つの層は出土遺物の検討・吟味から縄紋式後期と認定している。

C区は7つの層に分けている。4 混土貝層混土 20 - 40cm C 0 01。4 貝層 40 - 60cm C 1、5 貝層 60 - 70cm C 2・5 貝層 70 - 80cm C 3、5 貝層 80 - 90cm C 4。4 貝層と5 貝層のC 1 から C 4 までを出土遺物の吟味の結果、縄紋式晩期新と認定している。5 貝層 90 - 100cm C 5 7 C D 5。5 貝層 100 - 120cm C 6 7 C D 6、5 貝層 120 - 140cm C 6 7 C D 7。これら2層を出土遺物の吟味の結果、縄紋式晩期旧に認めている。6 混貝破礫層 C 8 7 C D 8 は出土遺物の検討・吟味して縄紋式後期と認めている。

D区は10の層に分けられている。26 表土下混土貝層 D 01、26 表土下混土貝層 D 02。27 第一貝層 D 03、27 第一貝層 D 1、27 第一貝層 D 21、27 第一貝層 D 22。これら4つの層は出土遺物の吟味により縄紋式晩期新に認定されている。30 第三貝層 D 3、31 第四貝層 D 4、2 最下混土貝層（第四）D 41、4 第五層 D 5、4 第六層 D 6。これら6つの層は出土遺物の検討・吟味の結果縄紋式晩期中と認められている。4 VII 砂礫層上部 D 7。この層は出土遺物の吟味により縄紋式後期に認定されている。4 第八層 D 8。

E区は14の層に区分されている。30 第一貝層 - 20 E 0、30 第一貝層 - 20 E 1。31 第二混土貝層 - 60 E 2、31 無注記の層。これらの層の出土遺物の吟味によって縄紋式晩期新に認定している。31 第三混土貝層 E 3、31 第三混土貝層 E 4。31 第四混土貝層 - 50、31 第三混土貝層 E 5、31 第三混土貝層下底 - E 52 -。これら3層を出土遺物の検討・吟味から縄紋式晩期中としている。5 第七混土貝層 E 7、7 第七混土貝層 E 71・72。番号なし 最下層上部 E 81、番号なし 最下層上部 E 82。この2層の出土遺物の吟味により縄紋式後期に認定している。

F区は8層に分けている。26 表土 F 6、2627 第一貝層（泥土）F 1。2627 第二貝層 F 2、27 第三貝層 F 3。これら二つの層は出土遺物の検討・吟味から縄紋式晩期新に認めている。27 第四貝層上部 41、29 第四貝層 F 4、30 第四貝層下部 43。これらの層は出土遺物の吟味から縄紋式晩期旧と認定している。30 第五貝層 F 5。2 貝層下礫層 F 7。

G区は11の層に区分している。5 第一貝層 G 1、5 第一貝層 G 2。5 第二貝層 G 2。この層の出土遺物を検討・吟味して縄紋式晩期新に認定している。5 第三貝層 G 3。5 第四貝層 G 4、6 第五貝層 G 5。これらの層は出土遺物の吟味から縄紋式晩期中に認められている。7 第六貝層 G 6、61。7 第七貝層 G 7、7 第八貝層 G 8。これらの層は出土遺物の検討・吟味から縄紋式晩期旧に認定されている。8 最下層 G 9。

H区は8層に分けられている。26 混土貝層 H 1。この層の出土遺物の吟味から縄紋式晩期新と認定している。27 混土貝層 H 2。26 純貝層 H 3、27 純貝層 H 4、29 純貝層 H 5、29 純貝層 H 6。これらの層の出土遺物の吟味により縄紋式晩期旧と認めている。29 混土貝層 H 7。30 混土貝層 H 8。砂礫層。

I区は5つの層に区分されている。30 第一貝層 I 1 i1、30 第二貝層 I 2、31 第三貝層 I 3 i 3、31 第四貝層 I 4 i 4。これらの層から出土した遺物の吟味から縄紋式晩期旧と認定している。31 混土貝層 I 5 i 5。この層の出土遺物の検討・吟味から縄紋式後期に認めている。

J区は6層に分けている。26 純貝層 J 2、27 純貝層 J 3、27 純貝層 J 4。これら3つの出土遺物の吟味から縄紋式晩期旧に認定している。27 破碎貝層（基底）J 5、29 礫層 J 6、29 黄色砂礫 J 7。これらの層は出土遺物の吟味から縄紋式後期に認定している。」

吉胡貝塚の貝層積成順序を各層の位置、重畳の状況と、これに伴う土器の古さ等を総合してつぎのように要約している。

「一、縄紋式後期においては、このトレンチの部分は細礫層が露出した状態であつた。この時期に土を敷いた床がその上に作られ（I区等）又は浅い貝層が作られた。（A区、I・J区）

二、縄紋式晩期のはじめ南北部（A・B・C区）に混土貝層が堆積した。その後南部（I・J・H区）に純貝層が厚く構成された。中央部は貝層の堆積なく、凹んでいたと考えられる。

三、縄紋式晩期の中頃に凹地に混土貝層が堆積した。この時期に埋葬がこの層のうちに、又は礫層を掘って行われたらしい。北部及南部にはこの時期の遺物層が作られなかつた。

四、縄紋式晩期の中頃以後、北部では晩期の古い混土貝層、中央部では同じく中位の古さの貝層の上に貝層が堆積し、両者を覆うてしまった（晩期新）。

五、この貝層は後踏み固められ、又は貝殻が粉碎されたりした。その時期は縄紋式直後と、その後数百年を経た陶質土器の行われる時期であつたらう。又これは近代にまで及んだらう。」

このあと石器、骨角器、貝製品を記載したあと土器について言及している。すなわち、縄紋式後期後半

A、縄紋式後期後半B、縄紋式晩期旧B 大洞B C安行3b、縄紋式晩期旧A 大洞B、縄紋式晩期中 大洞C旧、晩期新 大洞A である。

山内清男が吉胡貝塚の発掘調査でおこなったのは、地質学における層位学の方法による層位分層である。すなわち「累重している地層を層序関係、岩石の諸特性、含有化石、生成時代などを尺度として、体系的に区分すること。尺度によって、いろいろの種類の区分がありうるが、主として岩相に基づく岩相層序区分、主として含有化石に基づく生層序区分あるいは年代層序区分などが、ふつうにおこなわれる主要なもの」といわれている層序区分である（山田 1976）。吉胡貝塚で見た目で区分されたものが地質学でいわれる単層であることを明らかにするためにいくつかに分けられた層に含まれている土器などの遺物を手掛りに確認したのである。こうして確認された単層を型式という概念で把握したのである。この作業がきちんとなされて土器型式が決められたのである。この貝塚における層位分層の方法は山内の独創的なもので、このことを理解しないものが山内が細別型式といっていることを分かることはできない。筆者は松本彦七郎の日本石器時代土器研究に学んだものと推量している。

なお吉胡貝塚の出土遺物の整理では発掘に参加した坪井清足が手伝っていた。その作業のやり取りは熾烈かつ激烈なものであったという。東京大学理学部人類学教室の山内の私的助手をしていた市原壽文が筆者に語ってくれたことがある。坪井は滋賀県安土遺跡の発掘でも同じ体験をさせられているのである。

山内は2m四方の発掘区を設けて、層毎に発掘したのである。前にのべた愛知県吉胡貝塚の発掘調査でおこなわれた層位分層の単層をみとめる方法をみてみよう。「発掘の順序に従って、深さ或は層によつて区分されて採集され、現場で紙袋に容れられ、その紙袋に、発掘區、層又は深さ記入されている。袋の数は百数十に達しており、資料は一應それだけに區分されている譯である。教室に搬入後、袋中の土器を點検し、中には湿っているものがあるので一旦乾燥し、水洗した。次に土器片に発掘區及層を示す符合を書き入れた。挿圖四一は各區の土器が如何に區分され発掘されたかを示すために用意したものであつて、各袋書いてあつた層の名称、発掘された日（左側）、及びこれに与えたそして土器片の裏面に記入された符合（右側）を示したものである。」B区では8つの層に区分されている。層位分層によって掘られた6第三貝層 B3と67第四貝層 B4を出土遺物の検討からひとつの単層と認定している。7第五貝層 B5と第六貝層 B6を出土遺物の検討から単層と認めている。8礫層上部 B7と8礫層下部 B8を出土遺物の検討から単層としている。これは地質学における層位分層による単層の確認作業である。これらの単層は人間の生存活動の結果形成されたもので一定の時間幅を有するものである。松本彦七郎の日本石器時代土器の研究でおこなわれた方法も同様のものである。山内は松本彦七郎に学んで会得したか、直接教えを受けたと考えている。ほかの研究者の見かけの観察による貝層区分を彼らと同じとみるのは誤りといえる。松本は単層から出る出土遺物すべてを「式」よんでいた。山内はそれを「型式」といい、土器以外の遺物すべてを含めた概念としていたのである。佐原 眞 は土器を問題にしていたようにのべているが、まちがいである。この日本先史時代土器の研究法はひとつの遺跡の中でいくつかの地点、一地方のいくつかの遺跡でおこなったのである。そして、東北地方で見とうしが立つと東京に居を移して、関東地方を中心にして日本全国の縄紋時代の遺跡で実践したのである。「縄紋土器型式の細別と大別」で研究の経緯についてまとめると共に縄紋式土器編年表はじめて提示したのである。

「日本先史時代概説」の中の「Ⅲ 縄文式文化」で縄紋式土器の地方型について次のようにのべている。

「縄文式土器は地方によって差がある。いつも少なくとも数個あるいはそれ以上の地方型がある。これらの地方型はある期間連続していることがあるが、時には境界が変わり、地方型の配置の転換が見られる。

また地方型がよく調査され、たまたまその特徴を捕えることができる場合には、その地方型の範囲がはなはだ狭いことがある。例えば松島湾付近の縄文晩期から弥生式に互って無文土器の存在を特徴とする型式がある。大洞 C2 式から A、A' 式さらに弥生式に続き柁型式に及んでいる。その広さは径 20 ～ 30km であろう。

大洞 C2 式の時期に岩手県南部は大洞 C2 式の特徴を持っている。津軽方面にはこれとは違う特徴の数々を持つ型式がある。その中間に位する岩手県北部金田一方面では両者と別な数々の細部の相違を持つ地方型式がある。この型式の広さは余り広いものではないらしい。一番の特徴は縄文の撚りが違い、条が右上から左下に向くものが多いことである。全国を粗く数地帯に分けることは常であるが、精査によって時に多くの細かい地方差を発見し得るであろう。

土器の地方型の存在状態は、住民が数百人（時には数十人から千人以上）の人員からなる多数の部族に分かれ、その若干が同一の土器型式を用いるということを想像すれば理解しやすいであろう。あるいは民族を言語学的群に分かつことと似ているといってもよいであろう。」（山内 1964）。

ここでのべられていることは、かつて山内清男・甲野勇・八幡一郎らが 1924 年春の加曽利貝塚の発掘の際に否定した鳥居龍蔵の日本石器時代土器部族説の新しいかたちで認めたことになる。松本彦七郎の日本石器時代異時代説との弁証法でいうところの止揚 Aufheben である。

V・G・チャイルドは『考古学の方法』の中で考古学における型式に関して次のようなことをのべている（V・G・チャイルド 1966）。

考古学者の仕事について「考古学は、人間の行為に基づく物質界のあらゆる変化を——依存する場合に当然かざられるが、——研究する。考古学の記録は化石となった各種の人間行動から成り立っているので、できるかぎりその行動を復原し、そこに示された思考を再現すること」にあるとのべている。「本書の狙いは、考古学者がその資料をどのように処理して記録を組み立てていくか、その資料を思考の具体的な表象としてどのように解釈しようとしているか、説明する」ことにあるとしている。

「考古学者はそれなりに、いわゆる“型式、types という抽象だけを扱っているし、また扱わざるをえない。」「考古学者が歴史家のように、いや歴史家として、興味を示している種類の事象すなわち人の行動と思考である。」「考古学の対象物の価値、つまりそれが歴史上の問題に答えられる範囲は、主としてその発見状況によって決まる。」「考古学の資料は、それ自体美しかったり雄弁だったりすることは殆んどない。しかしその大部分は他のものと共に・の中に・を含んでといった関係にとってのその型式がいかなる意味をもったかについて手がかりを与えるものである。」

「考古学者が思考と目的の具体化としての人間行動の産物を扱うということは主張されてよい。では誰の行動であるか。役者誰なのか。いうまでもなく「社会」、つまり共通の目的と必要によってはげまされた共通の伝統にはぐくまれている諸個人の集合としての社会である。」「考古学は實際上、人間活動の産物を研究するが、」「社会から学んだ社会に特有な行動様式である。」

「考古学者がおこなう抽象的な型式に対しての規定は、見かけほどにはむずかしいことではない。」「一定の社会に認められ・採用され・具体化された個々人の創造物こそ型式だからである。そこではじめて考古学者歴史家ただし文化史家となる。その対象は具体的な個々人ではなく、そうした個々人が貢献してつくり上げた伝統を共にする人々の抽象的な集団である。伝統の共通は、その社会の全メンバーに共通の行動の型をとらせる。だから製作物や葬礼や食事の残滓などについて認定可能な標準型式が当然生じてくるわけである。」

「一個の考古資料は、それが単一の社会の行動型だからこそ、実際に一つの型式なのである。それはまた、普通の一例であり概念の具体的な表現つまり具象であるからこそ一つの型式なのだ。この概念は、過去現代を通じて、ひとり製作者の頭脳の中だけではなく、個々の全成員に優越し、いっそうの持続性をもつ社会そのものの頭脳の中にも存在している点で、客観的である。」

V・G・チャイルドは型式について理論的根拠をしめたのである。

6 1924年春の加曽利貝塚の発掘の歴史的意義

a 歴史科学の存立基盤の基礎の確立

山内清男は1924年春の加曽利貝塚の発掘でB地点、E地点の層位的事実から加曽利E式、加曽利B式という年代的序列を確認した。さらに堀之内、安行については型式学的根拠から加曽利E式、堀之内式、加曽利B式、安行式という関東縄文土器の編年をたてたのである。これが山内みずから「加曽利の発掘（大正十三年三月）は土器型式の内容決定、層位的事実、年代的考察に向つて僕らを躍進せしめた」といった内容である。

加曽利貝塚発掘以後の縄文土器の編年的研究について次のようにのべている（山内1937）。

「大正後半期の先史考古学の一般的改革機運によつて誘致され、就中松本博士の実際の業績が指導的役割を持った。」「縄文土器の細別を試みこれを年代的に排列し、更に凸曲線縄文期（陸平式、厚手式に並行）、凹曲線縄文期（大森式、陸平式に略並行）に分け、或はこの方面の事情を綜合して、古墳時代に亘る独自の年代区分、系統に言及される」「精彩ある業績を残された」。

山内は地質学における層位分層により確認された単層を型式としていたことは前にものべたとおりである。この方法によって東北・関東で実施していったのである。しかし、1924年春の加曽利貝塚の発掘ではまだこの方法ではおこなっていないと推測する。東北帝国大学医学部解剖学教室に勤めるようになってからとおもわれる。

その後「中期以降の細別は関東・東北に於いて盛んに行われた。」「東北において中期以前の型式が続々発見され、引いては関東地方に於ける年代所属が議論的であった諸磯式の位置が確定し、古式土器の班列することとなった（前期）。更に一桁古い尖底ある土器型式の一群の存在が明らかになった」。

「縄文土器文化の最短期間の状態は縄文土器の型式区分を通じて知り得るのであるが、その区分が最も細くなる種、その変遷の詳細を明らかにし得るのであろう。型式は益々細分され、究極まで推し進むべきである。」「関東地方の後期即ち所謂薄手式土器に於いて、堀之内式、加曽利B式、安行式の区分がある」。これらは「さらに二三の細別型式があることが明らかになった。」

縄文土器型式の細別とその年代的編成は各地方に亘って遺漏なく行われなければならない。」「この種の調査は一国一郡の如き小区域に於いても行われ得るものであり、最も正確なる結果はこれら個々の成績の綜合比較によって達せられるであろう。」

縄文土器の細別は、20 - 30に達するのであるから、仮に大別を協定し得たならば、一般の記述に多くの便宜を生ずるであろう。」「私は前中後に早晩の二期を補い、全期を5期に分かつことを提案したい。型式の数の余り多い所謂前期を早期（尖底を有する本格的に古い土器群）及び前期（広義の諸磯式とその並行型式）に分ち、又所謂後期を後期（所謂薄手式の範囲、及び晚期（亀ヶ岡式及其並行型式））としたい。斯すると各期の細別型式は数型式、或は十型式未満となり、甚だしい差等をみなくなるのである。」

最後に、縄紋時代の実年代を「草創期がB C 3000年とすると、早期B C 2500年、前期同2000年、中期同1500年、後期1000年、晩期500年と比例的に割り当てることが出来よう」とした（山内1964）。

山内清男は縄紋土器の型式研究で、歴史科学の存立基盤となる縄紋時代の年代と地方について基礎をすえたのである。遺跡の発掘で地質学における層位分層による単層を確認することですすめられた。この方法は松本彦七郎に学んで会得したとみられる。これをさらに深めて体系化したのである。これによって歴史科学における時間の問題に科学的根拠を与えたのである。

b 縄紋時代の生産・聚落・墓地の研究への道をひらいた

山内清男の縄紋土器の編年的研究がすすめられるなかで、歴史科学の研究課題である生産・集落・墓地などの問題について次のようなことを提言している。

縄紋時代の生産にかかわる問題としてサケ・マス論、笹の実論、貝塚貧乏論、鹿・猪・ドングリ論ともいうべきことをのべている。これらを遺跡から出土する遺物と比較民族学ともいうべき、土器や磨製石器を持って農耕をおこなわない民族の文物で研究をすすめていた。

集落に関連しては縄紋時代の住居址の時期決定の問題、住居址の中の土器の出土状態、土器型式と住居址の型式にかかわる問題などについていくつかの指摘をしている。

墓地に関連しては、埋葬の時期決定、縄紋人の抜歯などの問題をのべている。

いずれも歴史科学研究にとって課題となる問題の解決への方向性をしめしていることは確かである。ここではくわしくのべないことにしておく。

引用参考文献

- 入村精一 1991 「クモヒトデとはどんな動物か？」『うみうし通信』VOL.11 12 - 23 頁 財団法人水生脊椎動物研究所
- 岡本 勇 1963 「加曽利貝塚の意義」『考古学研究』37 42 - 46 考古学研究会
- 柏野義夫 1970 「層序学」地団研地学事典編集委員会編『地学事典』611 平凡社
- 甲野 勇 1928 『埼玉県柏崎村真福寺貝塚調査報告』史前学小報 第2号 1 - 70 図版9 史前学会
- 甲野 勇 1953 『縄文土器のはなし』総237頁 世界文化社
- 佐藤達夫 1974 「序 学史上における山内清男の業績」『日本考古学選集 21 山内清男集』2 - 11 築地書館
- 佐原 眞 1984 「山内清男論」『縄文文化の研究 10 縄文時代研究史』232 - 240 雄山閣
- 鳥居龍蔵 1920 「武蔵野の有史以前」『武蔵野』第3巻第3号 武蔵野会
- 中村五郎 1969 『画龍点睛 - 山内清男先生没後25年記念誌 -』山内清男先生没後25年記念誌刊行会
- 松本彦七郎 1924a 「日本産化石象の種類（略報）」『地質学雑誌』第31巻第371号 255 - 272 東京地質學會
- 松本彦七郎 1924b 「日本産ステゴドンの種類（略報）」『地質学雑誌』第31巻第373号・第374号合冊 323 - 340 東京地質學會
- 松本彦七郎 1924c 「日本産マストドンの二新種（略報）」『地質学雑誌』第31巻第375号 395 - 414 東京地質學會
- 松本彦七郎 1919a 「宮戸島及瀬澤介塚の土器 附特に土器紋様論」『現代之科学』第7巻第5号 現代之

科学社

松本彦七郎 1919b 「宮戸島及瀬澤介塚の土器 附特に土器紋様論 (二)」『現代之科学』第7巻第6号
現代之科学社

松本彦七郎 1919c 「日本石器時代土器」『理学界』第17巻第3号 理学界社

松本彦七郎 1919d 「宮戸島里浜介塚の分層的発掘成績 (続)」『人類学雑誌』第34巻第10号 東京人類
学会

松本彦七郎 1919e 「日本石器時代土器 (二)」『理学界』第17巻第4号 理学界社

八幡一郎 1924 「千葉県加曾利貝塚の発掘」『人類学雑誌』第39巻第4号・第5号・第6号 東京人類
学会

山田一雄 1970 「層序区分」地団研地学事典編集委員会編『地学事典』611 平凡社

山村貴輝 1996 「山内型式学についての覚書」『画龍点睛—山内清男先生没後25年記念論集—』151 - 157
山内清男先生没後25年記念論集刊行会

山内清男 1937 「縄文式土器の細別と大別」『先史考古学』第1巻第1号 29 - 32 先史考古学会

山内清男 1964 a 『日本原始美術 1 縄文式土器』講談社

山内清男 1964 b 「(下) 画龍点睛の弁」『成城新聞』第86号 成城大学図書館

山内清男 1939 a 『日本先史土器圖譜 第一部 (関東地方) 第三輯 圖版20 - 29 加曾利B式』内容略
説 1 - 3 編輯後記4 先史考古學會 10月

山内清男 1939 b 『日本先史土器圖譜 第一部 (関東地方) 第三輯 圖版30 - 39 加曾利B式 (續)』
内容略説 1 - 3 先史考古學會 11月

山内清男 1940 a 『日本先史土器圖譜 第一部 (関東地方) 第六輯 圖版50 - 59 堀之内式』内容略説
1 - 4 先史考古學會 3月

山内清男 1940 b 『日本先史土器圖譜 第一部 (関東地方) 第七輯 圖版60 - 69 安行式土器 (前半)』
内容略説 1 - 4 先史考古學會 8月

山内清男 1940 c 『日本先史土器圖譜 第一部 (関東地方) 第九輯 圖版80 - 89 加曾利E式』内容略
説 1 - 4 先史考古學會 8月 1941 (昭和16) 年

山内清男 1941 a 『日本先史土器圖譜 第一部 (関東地方) 第十輯 圖版90 - 99 安行式土器 (後半)』
内容略説 1 - 4 先史考古學會 6月

山内清男 1941 b 『日本先史土器圖譜 第一部 (関東地方) 第十一輯 圖版100 - 109 安行式土器 (板
倉沼発見土器特輯)』内容略説 1 - 4 先史考古學會 8月

山内清男 1952 「第三章 各班調査報告 第三節 第二トレンチ」文化財保護委員会『吉胡貝塚』埋蔵文
化財発掘調査報告 第一 93 - 124 吉川弘文館

山内清男 1964 編著 『日本原始美術 1 縄文式土器』原色図版20 グラビア134 本文135 - 158
講談社

山内清男 1964 「日本先史時代概説 III 縄文式文化 140 - 144

山内清男 1964 「縄文式土器総論 I 縄文土器の年代別と地方別 148 - 150

II 縄文土器の製作と用途 150 - 153

III 縄 文 153 - 155

IV 口縁の突起および把手 157

V 文様帯系統論

山内清男 1970 「鳥居博士と明治考古学秘史」『鳥居記念博物館紀要』 第4号 33 - 35 徳島県立鳥居記念博物館

V・G・チャイルド 1966 『考古学の方法』（近藤義郎訳）河出書房新社

Childe, V. Gordon, 1956 Piecing Together the Past, Routledge & Kegan Paul. London

Matumoto, H 1921 Note on the Stone Age People of Japan, *American Anthropologist*, Vol.23, No1, 50 - 76, American Anthropologist Association

〔元横浜市歴史博物館学芸員〕